
よどみと流れ

森屋27

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よどみと流れ

【ZPDF】

Z0229S

【作者名】

森屋27

【あらすじ】

専門学校に通う奥村は、理想の自分と現実世界での自分の居場所のなさに、失望の淵に立っていた。そして、クラスメートの田辺の存在により奥村は入水自殺することを決めた。

夕方が近づいてきている。1月の雪を含んだような冷たい風が顔を掠めた 特に河川敷は風が冷えている、コンクリートが黒く変色している。川沿いには古びた家が連続的に並んでいる。人がすんでいる気配がないが、たぶん住んでいるのだろう。辺りには人はいない。

今日は曇り空で雨が少し降つたので 夕日も淡い朱色で上空は薄水色だ 川に反射する光もどこか鈍い 路面電車がガタガタと走っている陸橋の下は音が突き抜けている、しかし、橋の下の川は光も音ものみこんでしまつた黒が漂つっていた。流れる白い泡が鮮明に見える 光はあるのだ。

ガタンゴトガタン キー耳障りな音が聞こえた 路面が信号に捕まつたらしい。

まだ5時だ 日の入りは5時25分あと25分で今日はもう終わったのと同じだ。僕も今日でおしまい。けど、明日は来ない。僕が僕を終わらす。

バッハのアリアを聞きながら 僕は明日のことを考えていた、何を食べるか とか 何時に起きるとかそういうことじゃなく、明日僕がどう終わりにするかを、しかし どうにも決まりやしない 場所が悪いのか部屋からでた。

一人暮らしをして2年がたつた。実家はここから8時間バスに揺られたところにある。遠い、しかし、その遠さが僕を軽くした。

元々 内向的で人付き合いも悪かつた。そんな僕に友達は地元でもここでもできそうにもなかつた。

毎日鬱々としていた。僕は集団の中で一人ということが、どうしょもなく苦痛でしかなかつた。しかし、行かなくてはならないし、

友達を作る勇気もなかつた。

ある日、鉛筆の箱を盛大に廊下でぶちまけた。カラソカラソと音を立てて。恥ずかしくて、恥ずかしくてどうしようもない緊張におそわれ、鉛筆を急いで拾つていた。

廊下に誰かの靴を見た。見上げると、そこには同じクラスの田辺という奴がいた。田辺は少し間を置いてから、無言で拾つてくれた。クラスでも明るくいい奴だと評判があつた。

ひょいひょいと拾つてくれた彼に対して、僕はありがとうと本当に小さな声でいつたが、彼には聞こえたらしく一ヤリと笑つて肩をぽんぽんと叩いて立ち去つていつた。

これだけの出会いだつたが、僕にはとても大切なことだつた。あんな風に人と接してみたかつた、初めてもつた願望だつた。しかし、その願望は叶わなかつた。

川沿いを歩いていた 大きな川で鳥も多い、鷺やらカモメやらが羽を休ませている。今日はよく晴れていのでよく冷えている。

手が寒い、ポケットに手を突っ込んだ、指に力サリと何かが触れただしてみると、透き通る黄緑色のマスカット味のキャンディだつた。甘酸っぱく おいしいキャンディだつた。包装をといて ポイッと口に含んだ酸っぱさが口の中で痺れた。それでも、僕はその感覚に耐えられず、口からそれを川に捨てた、甘さが取り残された口はなんだか淋しかつた。

トポンと小さな音を立てて、川に沈んでいつた。

その時 僕は思い描いた川に飛び込んだ飴がゆっくりと速度を保しながら 川と同化するために溶け始める 糖度の高い水が熱気のよう漂い同等の水へと落ちていく。そして、飴はどこにもなく、川になつた。僕はぼんやりと川を見つめていた。僕は決めた。

路面が動き出した。『う　がたん　がたたん　と　遠ざかつてい
つた。僕は川を見つめている。

マスカットキャンディと僕が溶けこんだ川だ。もうすぐ日が落ちる、
僕は、太陽のように落ちていこう。

地球の反対側に行き人々が忙しなく動いているのを　僕はクスリと
笑う。やはり　僕には太陽は似合わない。僕の先はほの暗い川だ。
そうして　僕は飴となり　川におちた。

体に何かが染み込んでくる感触がする。僕は前のめりのままおちて
いく。目が痛い。

目を開けているのか　つぶっているのかわからない　僕の中の感覚
は消えていた。外界からの刺激しかわからなくなっていた。体が空
洞になつたようだ。

ぴちゃん　ぴちゃん　体の中から聞こえてくる　空っぽになつた
体に川の水が染み込んでいるんだ　ぴちゃん　ぴちゃん　僕はそう
思った。

溜まりにたまつた水たちはそれでも　染み込む　染み込む膨張して
いく皮膚たちがこれでもかと　薄くなる　細い血管が網のように広
がっている　はたからみれば　それは、　大きな毛糸の玉のようだ
細い長い血管が全身を取り巻いている　血管は自らの崩壊を知つ
て　皮膚から抜け出していく　一本また一本と　水の中に糸がまつ
ていく　中心は鈍い黄金に発光している　もう人間ではなくなつて
しまつたのだ　これから行く世界のための転生の準備　僕はそう夢
をみた。

しかし　僕は　ただ沈んでいくばかりだ。

特別なことなんて何にもない　何にもないのだ。僕はそれに懐かし
い絶望的な思いが溢れた　これが僕なのだ　これこそが僕なんだ。
どれだけ　泣いても　叫んでも　己を切り裂いても　僕から僕は
でれはしないのだ。僕が僕に入った時点で後戻りはできなくなつた

のだ。まるで マトリョーシカのようだ 開けても 開けても 僕がズラリと背を変えて並んでいる その顔は不満があり不幸を呼ぶような顔だった。

しかし、一番小さな僕は不気味な笑顔だった 残虐性のある 思わず目をそらしたくなるような 毒を含んだ顔だった。僕が僕の方をジロリと見た、その目はニタリと笑いこう言つた――。僕は僕に襲いかかっていた。手が痛くても足が痺れても僕は手を止めることは出来なかつた。

これは目に見える殺意だ燃えたぎるような 焦げる臭いが鼻につく。

僕は立つていた。

赤い赤い世界に立つていた 地面はグニャリと曲がついていて 力を入れて立たないと 倒れてしまいそうだ。僕は立つていた。腕も手も足もなく 胴体だけで立つていたいびつな形、人間とはよべないだろう。

しかし、僕は思考することも喋ることも出来る、でも人間ではないらしい。出来損ないの彫刻のように、僕はそこに捨てられていた。赤く少し生臭さのする場所に、音がする。ぎい と下から響いた僕は目を下に向けた なんと 胴体には赤い少し寂れたドアがありそこから 僕が出てきた 手にはジョウロを持つていた。

彼はジョウロを傾けて 花に水をやるかのように 丁寧にまいていた。しかし、その水は水ではなく 赤く少しドロリとした液体だった。彼がこの世界を赤くそめているらしい。

赤い水がなくなつたら 急いで 僕の中に入り また 巻き始める。それを彼はずつとしていた。ふと彼が上を見上げた、ぐるりと見回しているうちに僕と目があつた。

彼は目をギヨロギヨロさせながら口をパクパクさせて ピタリと止んだと思ったら ニヤリと笑つて 僕の扉の方を指差した。僕が扉の方を見て見ると あの赤い水がダラダラと流れ出していた。

徐々に僕はそれと比例するように小さくなつて崩れ落ちた。体はな

くなり僕が水たまりのようになに地面からみていると 僕が見下ろしていた。

何故か少し嬉しいそうに僕を見つめていた 手にはもうジヨウロはない。それを見て、僕はズルリと地面に染み込んだ。彼は嬉しかったのだ。

僕が僕を解放できたのだと 嬉しかったのだ。

彼は今何をしていのか また新しく僕を溶かし始めているんだろうか。そう思うと、僕はたまらず 悲しい気分になった。内から何か出でいく感触があった。涙だった。

けれども 泣いても 泣いても川は悲しみも知らずに飲み込んでいく ただいるだけの存在 何も干渉しない だからこそ僕が選んだのに今は溜まらずそれが悲しかった。

無限に広がるこの気持ちは体の隅々に行き渡った。ふいに下降していく 僕の体が浮き上がったのだ。ほんの些細な拒絶が川の流れに乱れをつくったようだ。僕は焦った もう 戻りたくない。

それよりも やっと見つけたここから排除されることが とてつもなく怖かつた。僕はもがいた。それでも 浮かび続く 手を底に届くように力一杯 伸ばした。

手から離れていく風船のヒモをつかむよし、浮くものを引き止める。反対に僕は完全なる落下を願い手を伸ばした。

手に暖かい感覚が伝わった。僕の手を誰かが掴んでいた。僕からゴボリと泡がでた。田辺くんだった。

彼は僕みてあの時と同じようにニヤリと笑った。僕は動けなかつた。何故彼がここにいるのか どうして僕を助けてくれるのか。

「妬ましかったんだる、田辺が。」

ああ、そうだ、僕が僕に言つたんだ。僕の最後の引き金を引いたのは 君だったんだ。田辺くん。

だから君なんだねだから 僕を助けるんだね。僕を落とすことができるのは 君しかいないんだ。 僕はそう思つた。

彼にあつたことで、僕自身のギリギリのバランスが崩れてしまったのだ。憧れの眼差しとともに湧く、腐敗臭の立ち込める嫉妬、そして自分への否定だった。

僕は沈んだ。肩を誰かがポンポンとたたいていた。その振動が体全体に広がった、意識が定まらない、乱視のように世界がブレる。気分が悪い、頭がグラグラする。内から何かでてくる巨大な気配、僕が口を開けると待っていたかのように。

ゴロリと僕よりも大きな黄色の丸い形のものがてきた。体に力が入らず、僕は横たわって虚ろにそれをみた。

黄緑色の物体は僅かな光を発していた。何か動くものがちらりと見えた。僕はふらふらしながら、それに触れてみた。暖かい。まるで母親の羊水の中に入るみたいな安心感、背中を丸くして中心から、ホースのようなものが端まで繋がっている。

トン　トントン　優しい音が聞こえる、母親がお腹を撫でているんだ、愛おしく、その幸福な存在に。僕はこの中に入っているモノが堪らなく羨ましくなった。

その眼差しが欲しくて、その温もりが欲しくて。

僕はいつの間にか手にしていたカッターでそれを裂き始めた。つうと、刃を突き立て優しく垂直に下ろした。そこから、黄色の液体がぶつくりと漏れだした。

徐々に徐々に減つて行く光景を僕は黙つて、遠くのほうで座つてみていた。

トロリと最後の滴が落ちた。

ビチャ　ビチャと辺り一面のひかる黄色い湖に波紋を作りながら、放たれる甘く懐かしい匂いの中、僕は中心にある、あの丸い幸福な場所を目指した。僕は「クリ」と唾液を呑み込み中に入った。僕は震えた。そこには、ありとあらゆるすべての人間のしあわせという感情を最大限まで高めた純粹で光輝な世界だった。

「僕は手に入れたんだ、この世界を、これは僕だけの物だ、これが

あれば僕はどんなことだって なんだつて出来る。

もう 僕はいらない。これがありさえすれば 他のものなんていらない！「僕は張り裂けるぐらい大きな声でさけんだ。

響き渡る声の中、ポツリ ポツリと静かな音が聞こえた。ホースがダラリと垂れ下がり、亀裂の入った箇所からあの黄色い液体がポツリ ポツリと滴り落ちていた。

その下に田をやると、さっきまで 安心と愛情に包まれていたモノが力なく背中を丸くして横たえていた。僕はいらないものを排除するためホースを干切り、それに手を伸ばした。

その時、後ろから誰かの声がした。僕は後ろに振り向いた、これ以上ここに誰もいれたくはないと思つたが、そこには誰もいなかつた。

「いいのかい それで君は本当によかつたのかい。そこに横たわるモノを犠牲にしてまでも、君は何かを手に入れられたのかい？」見えないものに向かい、僕は声を荒げた。

「もちろんさ、僕はこの世界を手に入れたんだ、犠牲なんて そんなこと知つたことじやない！」僕の感情は一点を突き破つてい。

溢れだした感情はとめることができなかつた。その声は静かに言つた。

「そうか、それなら君は前を見てみな、君が侵した犠牲者を』。そこで声は途切れた。

「僕は間違つたことなんてしていない。これは今まで耐えてきた僕への『褒美なんだ。」間違つてなんかいない。僕はそう思い作業の続きをするため、前を向いた。

そこには田辺くんが黄色い風呂に浸かっていた。

5時半の贊美歌がスピーカーから流れ出した 町全体に波紋状の波が静かに押しよしているかのようだ 僕はふとその音と寒さについて目を覚ました しまつたなこんな1月の川沿いでうたた寝する

んじやなかつた。

体が冷え切つてゐる　このままだと　風邪を引くなそう思いベンチを立つた。

一級河川が凍つた風をはこんでくる。川幅が大きく町をぬるりと分断しているその上にいくつか橋が架けられている。その橋を支える支柱が橋一個一個違い、好きだつた。

特に好きなのが駅前まで続く路面が通るオレンジ色の橋だ、が、もう何年も雨風や日光をうけて渋みのある茶褐色になつてゐる。柱は橢円形でゆるゆると上に行くほど細くなつていて水に浸る橢円はなにか頼もしくも感じれる存在感がある　それが4本川に突き刺さつてゐるのだ。

4本とも微妙に色合いが違い、見ていてもあきない。別に橋マニアではないが、自分が好ましいと思われる感覚に合致したものだけが好きなのだ。だからこの橋のしたにあるベンチを選んだのだ。

足の上からバサリと落ちた、視線が柱から地面に移り本が途方もなく這いつくばつてゐる。読書家の友人から面白いから是非読めと渡され本だ。

その物をボンヤリみながら土を払つた、緑色の爽やかな表紙で、たしかあらすじは水にまつわる話が短編で6章の物語で成り立つているのだそうだ。

はつきりいって　興味はまったくない　本はあまり読まない方だいや　まったく読まない。本に拘束されるのが嫌なのだ、どんなに感動で素晴らしい内容でもどうしても自分の目も脳もそれがすべてを占拠してしまつ。

悪く言えばハイジャックだ脳のハイジャック。そこからの解放と同時にくる時間の解放、読み始めてからの時差に精神が合致しない、いやな怒りさえ覚える。

だから、本は読まないし家では絶対読まないと思い、ここに来て読んだのだが、いつのまにやら、寝てしまつていた。すこぶる気分が

よくない、寒いのもだが時間がトリップしたことになんともいえない虚しさがあった。

ふと、賛美歌が終わっていつもの音が戻った時 夢を見ていたことを思い出した。黄色い世界、そして同級生の奥村がでてきたのだ、意外だった。

奥村とは教室も一緒にいたが、一言も話をしたことはなかった。

奥村はいつも窓側の一番後ろの隅に座っていた。

いつも何かに耐えるように座っていたようだ。しかし、一回だけ奥村と喋ったことがあった記憶がある。学校の中でも一番長い廊下で奥村が屈んでひたすら鉛筆を拾っている。

奥村は見るところ、友達のいない奴だったな と思い。鉛筆に触れた、拾った深緑の鉛筆を渡してやると びっくりした顔で、鉛筆を受け取つた。よほど緊張しているのか顔が綺麗な赤色だ。

すべて拾い終わると、聞き逃しそうな小さな小さな声でありがとうと聞こえた。どういたしましての意味を込めて肩をポンポンと 叩いて、長い廊下のドアを開けた。

それだけだった。それだけだが、奇妙なほど覚えていた。たぶん何故かと問われると、俺が無意識に憧れているからかもしない。憧れという言葉が合っているのかどうかがわからないが、奥村の孤独がうらやましかつた。

では、孤独になればいい。ということではない。集団の中での孤独は耐え難いものだと思う。それは、俺が弱いからそう思うのかもしれない。奥村はどうだったろうか？あの教室の隅で何を考えていたのだろう。

周囲の誘いにも頑なに断る奥村は 次第に孤立を深めていった。背中を丸めこの世界から消えようとしているようにも見えたし、もがき苦しんでいるようにも感じた。まだ消えたくない。しがみついているようにも見えた。

いつも周りに誰かしらいる俺は孤独ではなかつたが、孤独になりた

がっていた。ずるいのだと自分でも思う。奥村みたいに貫くことなんて出来やしない。自分がそれをしている奥村に憧れを持つことは必然なのではないだろうか、人は完璧ではないし、どこかしら欠けている。その空いている場所は憧れというピースでカバーするのではないかだろうか、そもそもしなきゃやつてられない。すくなくとも、俺はそうなのだ。

太陽も空から消えてしまい、ほの暗さが這い出でている。風も先程より冷え切っている。

体がぶるぶると震えてしまう。足早にベンチから離れた。ここから家まで走れば十分でつく、顔に氷の冷氣を当たられたみたいに痛い。細い小道の坂を抜け道路にでた。

車のヘッドライトが野生動物のように翔していく。そういえば、奥村はなにかいつもでは考えられないくらい、激しく怒っていた気がした。暗闇の中の黄色な世界で、何か思つたが、凄まじい冷氣を含む風に思考は遮断され、兎に角、はやくあの身も心もほぐす温かい湯に入りたい。とそう切に思った。

家につくと、すでに風呂は湧いていた。まだ、早い時間だから父も妹も帰つてきてない。一番風呂だといそと風呂に向かつた。今や我が家いちの最新のものだ。半年前ほどにやつとこさ自動の湯沸かし器がついた。それまでは風呂の真ん中にある四角いおもちゃみたいな手動のものでガスを点火させ、水をお湯にかえていた。そのものは小さな青いハンドルを真ん中として上に長方形の窓があり、二つの丸が並んでいた四角いものだつた。ハンドルを右に傾けると、ガスが「おー」と出てくる音が聞こえる、一つの丸が黒から朱色になると、すばやく右から左へと移動するとボッと火がつくものであつた。今してみると大変難儀なものだとおもつた。最終的にはハンドルが割れてしまい、むき出しどなつた鉄のハンドルをスパナで挟ん

でしていた。粘りに粘っていたが、とうとうハンドルを動かしても

ガスを吐き出さなくなってしまったのだ。次の日にはすぐに業者

の人たちが風呂に新たな命を授けてさつていった。
それからはバラ色だつた。いつもなら掃除に5分 水張りに40分
沸かすのに 30分 かかつていたのが、いまでは20分で沸く
のだ。見ていた家族は嬉し顔だつた。

そう懐かしい記憶を見ながら、風呂に入った。湯気で最初は気づかなかつたが、湯船は黄色に輝いていた。めつたに入浴剤をいれなにのに、何かの試供品か誰かにもらつたのだろうと推測した。凍えた体に湯が染み込む痛さと筋肉が弛緩していくのがわかる。徐々に湯と体が同等の温かさに変化しているのがわかつた。

息を一息吹き出す、寒さで緊張していた体がほどけた。甘い何か懐かしい匂いがする。この色からして、レモンか柚、柑橘系の匂いだと思つていたのだが、それとは反する甘い匂い。これは何の匂いだろつ。そう思いながら湯船に頭を沈没させていた。

泳ぐのは苦手だつたが、風呂場は好きだつた。昔はゴーグルをして風呂に入ったもんだ。背中を湯底につけて上を見上げると、いつも空間が不思議なぐにやりとした光景に姿を変えるのだ。ゆらゆら水がうねるほど世界は変わっていくのを自分がゼリーに入っている果物のように感じた。違う物質を通して外の世界がみえることがたまらなく興奮した。じぶんは黄色いゼリーの中にいるミカンのような存在だ。すぐ落ち着く、母親の胎内の中の様な安心だ。
力を徐々に抜いていく。

湯底はどこだ？俺はどこまで落ちて行く？奥村のあの顔、あれは俺を見ていたのに違ひない。口が激しく動いている、何にその感情を高ぶらせてているのだ？奥村のその顔を見ながら 意識を離した。

間違いなく田辺君だ。

黄色い風呂に浸かっている。

さきほど声も田辺君だったのだろうか？わからない。彼と話したことがないからどんな声か想像ができない。ただ、教室の真ん中から聞こえるあの笑い声は田辺君のものだとわかっている。

さきほどまでの感情が一気に元の状態にまで落ちた、理科の実験でよく使うガラスの温度計。許容温度を突破して、ガラスを貫いてあの赤い液体が外に飛び出たのだろう。

温度はどんどん下がっていく。冷えていく僕はどうしたものだろうと考えた。その中で僕はさつきの自分を思い出した。瞬時に奥の痛みに顔をしかめた。なんてことをしたのだろう。

僕は嫌悪感と吐き気が体の奥底からじばじばと体を舐めるように這い上がってくるのを感じた。の中にいた子はどうなったんだろう、僕はなんてことをしたんだろう。僕自身の欲望のために死なせてしまった。

僕は人を殺したのだ。体の底がガタガタと震える。何かが僕の体を舐めている、内側から。僕はその不快な感触に身震いした。手を見てみると、手は異物を含んだ奇妙な色をしていた。緑のようで暗い、黄色のようで明るい、鉄が錆びた色にも見える。僕はぞつとしながら手をふいたが、色はそれない。上に上にと這つてくる。染み込むよつにじつとりと。足をみれば足はこの世界の色と同化し始めている。

取り込まれる。そう 焦つた。しかし、僕にはもうどうすることも出来ない、拒絶することも。諦めに似た感情が体に宿った。視線を上に移動すると 田辺君がこちらを見ている。彼の表情は無表情だ

が、そこには暖かみのある不思議な顔だつた。何故彼は「ここにいるのだろう。彼の役目はもうないのではないだろうか？」

「なんでそんなところにいるの？」突然田辺君が喋つた。

僕はびっくりとした、やはりさつきの声は田辺君のものだと確信した。

では、あれを田辺君が見ていたことになる。僕は奥につまるような苦しい痛みを感じた。泣きだしたい、ここから逃げたい。

僕は頭皮が痛くなるほど、頭を引っ搔き回した。嫌だ。嫌だ。嫌だ！これ以上、こんな醜い僕を見てほしくはない！自分の一番奥の欲望を他人に見られた、激しく心臓が脈を打つている。早く、早くもつと奥底に行かないと、僕は壊れてしまう。両手で顔を覆つた。

身体が、震えた。

「奥村、そんなに奥にいくなよ、そっちにはそんなにいいもんがあるのか？」ぱしゃりとお湯を滑らせ、こすりながら腰をまわして縁に両肘をついて笑つている。

そっち？と僕は顔から手を離し、後ろを振り向いた。深い何でも飲み込む闇が渦をまいて続いている。僕がこれから行くところ。僕はぼんやりとそこを見ていた、同化はすでに腰の辺りまで浸食している。体がひどく重い鉛を埋め込まれたようだ。心もそれと同じくらい食い込むような重さだつた。僕は闇をじっと見ながらこういった。

「田辺君、田辺君は何故ここにいるの？」声は低い渋みと掠れを伴つていた。

「奥村、ここにはお前が望んでいるもんなんかありやしないぞ、これは無情だ。すべてその意識のなか処理されちまう。大切な感情も感覚も思い出も、その暗闇が浄化するんじゃない。ただの闇にしてしまうんだ。ここは一種のかい濾過装置だ。吸収しやすいように作りかえられてしまうんだよ。お前それでもいいのか？」田辺君は少し怒ったような声だった。

ああ、だからか。ここは一番最後の過程だつたんだ、僕の欲望を

濾過する。あんな醜い僕になつたんだ。でも、あれは本当に一番奥底にある確かな僕自身だった。僕は闇から田を離し、田辺君を見た。お湯が黄色から透き通る緑に変化していた。

「だけど、僕にはもうここにしか居場所はない！元の世界に僕が居れる所なんかない。僕はもう諦めたんだよ…田辺君、田辺君なら分かつていいでしょ？」僕は涙が出ないように懸命に耐えた。
田辺君は一瞬、とても痛そうな顔になつたが、すぐに鋭い目つきで僕を見た。

「奥村、自分から逃げてはだめだ。それでは前に進めない、自分を自分として認めて受け入れろ！そんなに、自分を否定するなよ奥村…。」

そうだ、僕は自分を否定し続けていた。内向的な自分、孤独な自分、妬む自分、こんな僕になんてなりたくないなかつた！僕は…！僕は…！僕が必要な僕になつたかった。

この今までいいのか？このまま分解されてもいいのだろうか？嫌だ！もう一度、僕は僕になりたい！

「奥村、こんな世界は偽りだ。自己満足でしかない 空虚な物語だ。目を覚ませ、奥村っ！その手を伸ばせっ！体に意識を宿せっ！」その貫くような声が響き終わる前に僕は駆け出した。すでに同化は胸にまで達していた。動く度に、鋭い痛みが全身を貫く。痛くて、痛くて。涙が汗のように流れ落ちる。残つた肩を振り回しながら闇を搔き分けていく。もう体力も気力も限界だつた、僕は声を上げながら目をつむり突っ込んだ。闇が僕を飲み込む 一瞬先に僕は緑の世界に入った。耳の奥に闇のけたたましい声が聞こえた。

浮かんでいるような、落ちているような不思議な感覚だ。

風呂に入つていたはずの俺は違う所に立つていた。

それは先ほどまでいた川沿いの陸橋の下だった。しかし 俺がいた陸橋ではなく もう一つ向こうの川上の陸橋だった。ここの中もお気に入りの一つだ。

X型の鉄鋼が幾重にも連なつて、綺麗な水色のペンキが施されている。水に浮かぶその情景はなんとも芸術的であった。こちらの橋は幾分か新しげであった。ゴトンゴトンと路面が走っている。たしかこちらの路面は図書館にいけるはずだ。そう おもいながら柱のそばに近寄った瞬間、そこに誰かがいることに気づいた。

もう夕方にさしかかり暗闇にいた人にはまったく気づかなかつた。いや、それだけではないことを悟つた。その人に、存在感が無い、まるでこの世のものではない雰囲気。まさか、と思い。さらに近づいてみた。距離を縮めるほどに、俺はこいつを知つてゐる。その人は奥村だつた。急いで、奥村に手を伸ばすが、ほんの一瞬早く、奥村は川に飛び込んだ。

俺は慌てて後を追つた。

バシャンと派手な音を立てて、奥村は凄まじいスピードで深い闇へと沈んでいく。俺との距離はずんずん開いていく。何故、奥村がこんなことをつ！ そう激しく思った。

「お前のせいだ、お前のせいだ わかつてゐるんだろ。知つてゐるんだろ。惚けたふりしちやつてさ。」 前方にイスに座る男ががいた。

口にはタバコをくわえて、プカプカと煙を楽しそうに吐き出してゐる。俺はひどく戸惑つた。なんなんだここは？ 薄暗い部屋の真ん中に男が一人鮮やかな青いスーツとそれとに似合う青いパナマ帽を被つた男が椅子に腰を深く下ろしている。部屋には家具は愚か窓もドアもない。密室の空間だつた。壁は薄茶色で少し黄ばんでゐる。

天井には裸電球がぶらりとぶら下がっている。床は板張りで古い匂いが漂つている。キヨロキヨロと見回していると、いきなり男が喋りだした。

「おまえさ、奥村がおかしいって気づいていただろ？」「気づいてほつといったんだろ？」男の声は湿度が高くぬめりとした不快なものだった。

そんな不快を吹き飛ばすほど、俺の心臓がどくりと嫌な音をたてた。なんで、何故こいつは奥村を知っているんだ？ やつは帽子の影の中にニヤリと笑いながら嫌みのように足をあげている。

気づいていた。奥村がおかしくなったのを、気づいたのは廊下で奥村に合つた数日後だった。いつも通り教室に入り、真ん中の席辺りにいる、「三人の友達」と喋りに入った。

ふと 奥村を見てみるとやはりいつもの場所に座っていた。窓側は今時寒くてみんな座りたがらない。それでも 奥村は座つていた。そんなことをぼんやり考えていたら、いきなり 奥村と目があつた。焦つて目をそらそうと思ったが、それは出来なかつた。奥村と目があつたのは俺だけだった。奥村の目は俺を見ているが、見ていない。あらゆる光を受け入れず、静かな闇へと沈んでいるような深い瞳だつた。

奥村の目には何も写つていらない、この教室もこの世界も。その瞳は暗い世界への入り口が覗いていた。見てはいけない。

俺の中で警告音がなり響いた。しかし、目がそらすことができない。「田辺つ！ 聞いてんのかよー」という不満の声が響いた。ハツとして目の前にいる友達に視線を移した。

「ああ、悪かつた。」と苦笑いで答え、友達がまた喋り出した。

俺はあの目から逃れられ安堵したが、話は耳に全然入らなかつた。あれは 死に向かうような目だ。翌日から俺は奥村を見ようとはしなかつた。

あの目を見るのが怖かつたし そんな目をした奥村を見たくない。自分で蝕まれると感じた。

おそらく俺いがいの奴は気づいていなかつただろう。それなのに俺は奥村を見放したんだ。フンッと鼻で笑う音がした。

「ほれみろ、何が憧れだよ。馬鹿みたい、チンケな冗談。お前さ奥村が嫌いだつたんだろ？ 孤独を持つていながらあんなに不満そうにぐじぐじとしていて、そつじゃなきゃ奥村なんかいつも田の隅にいられないだろ。

一人になりたい、人との関係を煩わしく思つてゐるのにスッパリ切ることが出来ない、よわあい、よわあい、自分の憎しみを奥村に向けたんだろう。」ケタケタと肩を震わし、不快な笑いを始めた。

すべてその通りなのだろうか？ 世界が狭まる感覚と視界が広がるその狭間で俺は考えた。そうかもしない。俺は奥村にすべてを背負わせたのだ。奥村を見るたびに、臭うあのものは心の内から憎しみが染み出していたんだろう。その臭いは、鼻を覆いたくなるような臭いだつたらう、だが、その臭いさえも甘美さを含む刺激的な臭いに変わってしまったのだ。

それでも、今の俺はもう奥村を見放す訳にはいかない。力を込めて心を奮い立たせた。そんな俺を見た男は笑いをピタリと止めて、つまんないのこいつと、氣だるげに立ち首をこきこきとならした。男はこちらをニヤリと笑いこう言つた。

「けど、一ついつておくよ、奥村の最後を押したのは君なんだよー田辺くん。僕と同姓同名、君自身のボクだよ。」そういうて、男はパナマ帽をひらりと右手でつまみ紳士気取りに左手を後ろにまわし帽子を振り下げた。

そこには、紛れもなく俺が立つていた。言葉もなく固まつてゐる俺に、男はここういった。

「ここは一瞬の大きな濾過装置だよ、人間を濾過するためのね。早くしないと、手遅れになるぞ。」帽子で肩を叩きながら男はそういった。

その声には先ほどまでの不快な含みは消えていいる。

「よく、受け止めたな。」そう言い終わる前に指をパチン鳴らした

瞬時、空間が弾かれるように波をうつた。

とたんに、立っていた、床板が巨大な掃除機で吸われたように、ボカリと開いた 重量に逆らえず俺は足元の暗闇にと落ちていった。ほんのわずがだが、男の顔が見えた、微笑んでいた。

黄色い世界に浸る間際だった。

本当に良いことなんて分からない。僕がどうしてこの世界に生まれたのか、偶然だったのだろうか。僕はその偶然を心底憎んでいる。どうしてこの世界にいるの？ そう問われれば、僕は何と答えるだらう。きっと答えることは出来ないだろう。つむきながら僕はこの世界に座っているだけ、立つ気力もない動くことさえ出来ない。そうさせるのは、僕の甘さからだ、自分が大事で大事で辛いことなんでしたくない、面倒くさいことも。悲しいことも苦しいことも逃げて逃げて、逃げ続けた。

見てはならない、見たくなんかない、こんな現実もこんな僕も、見るのは嫌だ。

助けて。誰か僕を救ってくれ。お願い。そうしなければ僕はもう、黙りになってしまふ。

ぼくに答えを教えて。

なまぬるい感覚に僕は目を覚ました。

くすんだ柔らかい若草色の世界に僕はふわりと浮かんでいた。ビニ
막でも続いているような広い世界だと僕は感じた。

ここは、柔らかい暖かさが広がっている、拒絶でもなく、受容でも
ない。ただ、僕が存在していることを認めている。ここにここにと
を認め与えてくれている。

僕は目を閉じた。さきほどの場所とは全く違つ、あそこはもつと冷
たく吸い込まれるような圧迫感がその世界を占めていた、すべての
熱を奪いさるような孤独の冷たさだつた。

僕はたまらず身体を抱いた。ふと、手を見てみれば、闇に飲み込ま
れていた手は、元通りの柔らかい肌色にもどっていた、白い肌の中
をマグマが絶えず爆発する音が聞こえる。

すべての闇は溶けたんだ。手をぎゅっと握りしめ、唇を噛んだ。生
きてる、僕は生きてる。堪えきれず、涙がこぼれ落ちた。

田辺君を見たとき僕はいつもの自分に戻る事が出来た。

腕をグイと後ろに小さく引っ張られ、振り返ると僕がこちらを見
ていた。その目は悲しみに染まっていた。それはとても切ない感情
で、僕の居るべき場所は、ここ、僕こそがキミの場所なんだと言わ
んばかりに僕は僕を取り込んだ。

懐かしい胸の痛みが体を縛つた。あの目は、拒絶されていくこと
に諦めを見出した孤独な瞳だつた。僕はどれだけ僕を苦しめてきた
んだろう。涙はいつそう激しく流れ落ちた。

それはアクアマリンのような透き通った青色だつた、涙の粒はこの
世界と触れ合い滲んでいく、とめどなく落ちてくる粒は小さな灯火
を内包してこの世界に訴えた。

生きよ、僕は生きることを望む。

僕は、僕であることを認めて受け入れる。僕は、僕と一緒に生き
て行く。

いつも、僕は僕を排除したかった。いらないと思った。

自分に背を向けて、見ない振りをした、いないものだと思った。けれど、僕自身を否定することで、僕の理想と僕の現実がお互いを受け入れず反発し合い、内部で膨れ上がりめりめりと僕自身を引き裂いてしまった。

受け止める勇気がなかつた。認めたくなかった。

多分、一番最後の闇の世界にあつた黄緑色の物体に入つていたのは、僕だろう。僕が、僕自身を殺していたんだ。今まで何度も、何度も。それを揶揄していたのだと気づいた。

いつも自分から目を反らしてきた。でも、見なければならい。どんなに目を反らした所で僕自身は決して別な誰かになることは出来ない。

嫌になるかもしれない、死にたいと思うかもしれない。それでも、今この胸に灯つた火を僕は守ろうと思つ。

覚悟と同時に目を開けた。若草色だった世界は、透き通つた、青の世界に変化していた。清冽な感覚が身体を貫いた。身体はしっかりと立つていた。ずっと浮いていた僕は、自分を支えるという動作に四苦八苦した。

背筋を伸ばしながら身体の均等を保ち、一步を踏み出した。汗が流れ落ちる、辛い。まったく使つていなかつた筋肉が痛みを訴えている。体が震える。よろめきながら僕は、笑つた。辛いのに、痛いのに、笑顔がこぼれてしまう。

「奥村、何笑つてんだよ。」

少し離れた所に、田辺君が腕を組みながら、立つていた。柔らかな笑顔だった。

「なんだか、とても楽しくて。つい……」

僕は照れながらそう答えた。

『そりゃ、世界は楽しいもんなんだよ！お前はもっと楽しむべきだよ。奥村、俺はさ本当の事はわからないけど、改めて自分を見れた気がする。……ごめんな。』

その後の言葉はでなかつた。いや、言えなかつた。直接伝えるのは良くないと直感的にそう思つた。奥村は理解できない顔だつたが、少し悲しそうに、それでも目に光が灯つていた。

「僕もそうだよ。ここに来てよかつたのかもしれない……。本当の事はわからないね。きっと誰にもわからない。」少しうつむきながら、首をゆるやかにふつた。

僕はまた涙を流した。思い出したのだ、僕が僕にしてきた事を、体がドスリと重くなつたが、それでも、歩みを止めなかつた。ここで止まるべきではないと思つた。

それを、受け止めなければ僕は前に進めない。それを実行に移さなくては意味がない。そう、心に言い聞かせた瞬間、閃光が走つた。

胸から、一羽の黒い大きなカラスが翼を広げて飛び出した。とたんに、一羽のカラスは融合し真っ白な羽へと色が変わつた。純白衣を纏いながら、羽を散らしながら羽ばたき青い世界を貫いて行つた。

いつの間にか握つていた白い羽を持ちながら、呆然とその様子を見ていたが、気づくと、さきほどまで重かつた体が嘘のように軽くなつていた。胸を撫でながら、去つて行つた方向を見上げた。あれは、もしかして……と思つたとき。

「あんな奇麗な鳥はじめてみた。奥村すげーな。」

まだ、見上げたままの彼はそうつぶやいた。何だかその姿が、幼く見えて思わず笑つてしまつた。それに気づいた彼は、誤魔化すように、

「お前のせいで、エライ目にあつたぜ。なんか奢れよ!」

と、ブンスカ怒つたまねをした。彼がここでどんな目に遭つたのかは分からぬが、きっと大変だつただろ?と思つ。僕は、汗だくになりながら追いついた彼の顔を見て、

「うん、わかったよ、田辺。」

彼はニヤリと笑って、そうしなくっちゃないとボソリと言いながら、僕の肩をポンポンと叩いた。帰ろう。一人は頷いた。

僕は握りしめていたものがそつするための物だと確信を持つて、白い羽を青い世界に突き刺した。青い空間は風船のように弾けながら、細かい青い結晶となつて、一瞬にして辺りに散っていく。世界が静かに去つて行くのを見つめながら、手をしつかり握り合つて僕たちは浮き上がつた。

一月の川は心から凍てつくほど冷たく流れている、浮上する緊張感を胸に秘めて僕はこう思った。

どんなに助けを求めても、自分が変わろうと思わなければ意味がない。けど、その勇気を与えてくれるのなきひと、僕はこれからも生きて行くことが出来る。

振り返らずに前を向いて僕は言った。

「ありがとう。僕は、もう、一度生きてみるよ。」

最後の涙を流して僕たちは、光に包まれた世界に帰つた。

ああ、5時半の賛美歌が聴こえてくる。

END

(後書き)

初めて完結出来た小説です。拙い文章であります、よろしくお願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229s/>

よどみと流れ

2011年10月8日22時06分発行